

マザーテレサ 帰天後七年にして福者に

PARABRA (475), X-03, pp.57~60

アグネス・ゴンジャ・ボヤジューは1910年8月26日に古いアルバニアの町スコピエ（現在はマケドニア共和国の首都）のカトリックの家族に生まれた。幼児期を思い出しでは、誇らしげに言っていた。「私の母は聖なる女性でした。私たちをイエスへの愛の中で育ててくれました。彼女自身で私たちの初聖体の準備をしました。すべてに越えて神を愛することを母から学びました」と。12歳のときから、修道女になって「キリストの愛のメッセージを広げる」ために宣教師になる召し出しを感じた。18歳のとき、ダブリンのロレット会修道院に入る。1928年の秋のことだった。「私が修道院に入ることは、キリストが私の家族と私に求めた犠牲でした。と言うのは、私たちはとても愛し合っていた家族だったからです」と後に述懐している。

同年11月、インドに向けて出帆。1929年1月6日にカルカッタ到着。ダーズリンで修練期を終え、1931年3月25日修道誓願。修道名として選んだのはテレジア。「しかし、それは大聖テレジアではなく、小聖テレジア、幼きイエスのテレジアを選びました。」

何年もの間、教育に従事した。カルカッタにあった唯一のカトリック学校、聖マリア高等学校で教鞭をとった。「教えるとは、何か神とともにする、美しい使徒職の一つです」と言ったことがある。

新しい神からの呼びかけ

1946年、黙想会に参加するために電車でダーズリンに向っていたとき、神の新しい呼びかけを受けた。そして、ロレット会を去って、最も貧しい人々のために働く決意をした。「修道院を去って貧しい人々の間で行きながら彼らを助けなければなりません。すべてを捨て、スラム街で最も貧しい人々の間でキリストに従えという声が聞こえるのです。それは神の御旨で、私はそれを果たしたいのです。」

修道会を出る許可をもらうために、カルカッタの大司教を説き伏せるのは容易ではなかった。しかし、1948年の初旬、修道院長と教皇ピオ12世の支援を受けて、彼女の望みが認められた。そのときから、彼女は飢えている人々を助け、病人を訪問し、道端に捨てられた瀕死の人々に付き添うという仕事に従事した。間もなく、数人の若い女性たち
その多くは、マザーのかつての教え子であった がその運動に加わった。カルカッタのスラム街の隅々から叫び声を上げていた貧困と戦うために。

1950年、ピオ12世は「神の愛の宣教会」に認可を与えた。この新しい修道会の会員は、清貧、貞潔、従順という伝統的な三つの誓願に、最も貧しい人々に自己の人生を捧げ、自己の仕事に対して物質的な報酬を受け取らないという誓願を加えた。修道会の目的は、修道女たちを活動に従事させることではない。マザー・テレサは、彼女たちが最も貧しい人々の世話に当ることを望んだが、それは信心生活を決して疎かにしないという条

件の下であった。1976年、フィラデルフィアでの聖体大会で行った講演の中で、自分の修道会のシスターたちが繰り広げる膨大な仕事について話しながら、言った。「彼女たちは、その仕事に必要なエネルギーを毎日の聖体礼拝から引き出します。この一時間の礼拝がなければ、彼女たちは自分の仕事をするのはまったく不可能になるでしょう」。あるインタビューで、次のことをはっきりさせている。「私たちは、何よりもまず修道女なのです。私たちは、慈善事業のために働く者でも、教師でも看護婦でも医師でもありません。私たちは修道会の姉妹たちで、イエスの名によって貧しい人々に使えるのです」。

全世界で

神の愛の宣教会のシスターたちが最初にしたことは、道端やどぶに捨てられた赤ちゃんを拾い集めることだった。そして赤ちゃんから瀕死の人々に広がっていく。1952年、マザー・テレサは、ある路地でねずみに両足をかじられている若い傷ついた女性を見つけたのが、そのきっかけであった。この人々のために「死に行く人々の家」を開設。創立者の生存中にカルカッタだけで、3万人のこのような人々を収容した。「あの人たちは動物のような人生を送ってきました。少なくとも死ぬときは人間として死ぬようにしてあげたい」とマザーは口癖のように言っていた。

徐々に彼女たちの家は全インドに広がっていった。(中略) 間もなく、修道会は全世界に広がる。ベネズエラ(インド以外の最初の国)に始まって、アメリカ合衆国(ここではエイズ患者のための家が開かれた)、コロンビア、ペルー、アフリカ、東欧諸国。教会で召し出しが枯渇している時期に、マザーの修道会には志願者が増えていった。

外見上は弱々しく見えるマザー・テレサは、大地震の後のアルメニアに、飢饉に苛まれたエチオピアに、砲弾の飛び交うカンボジアとリバノンに、チェルノブイリ原発事故の後の旧ソビエトに、姿を現した。誰か慰めを求めている人がいるところ、そこに彼女はいた。(中略)

エイズの蔓延を前にして、「私たちは祈り赦さねばなりません。ある人たちはエイズに自らの責任で感染しましたが、他の人々は他人のせいでした。まだこの病気についてはほとんど知られていません。この病気にかかった人は恐ろしい、恐ろしい苦しみを身に感じます。中でも病人が監獄にいる場合は格別です。少し前のことですが、監獄にいた二人の病人を訪問しました。獄中では死にたくない、外に出たいと言っていました。私が求めますと、許可が降りました。数日後、一人が私に言いました。『マザー、激しい頭痛を感じる時、私は茨の冠を被せられたイエスの苦痛に私の苦痛を合わせます。背骨が痛むとき、鞭打たれるイエスの痛みに。手と足に鋭い痛みが走るとき、十字架に釘付けにされるイエスの苦しみを思うのです』と。この人は数ヶ月前に凶悪犯罪のために終身刑を宣告された人でした。今は死を目前にし、こんなに美しい仕方でイエス様と一緒に苦痛と苦悩を抱きしめることができたのです。罪深い生活をした人にこのような変化が起こったのを見ることは、またどのように神が彼にこの繊細な愛と赦しをお与えになったかを見るこ

とは、とてもすばらしいことです」と言っていた。

ノーベル平和賞

年とともに、マザー・テレサの名は世界中に知られるようになり、彼女には賞や勲章が雨と降ってきた。中でも1979年にはノーベル平和賞が与えられた。彼女にとってそれは驚き以外の何ものでもなかった。候補に上がったときも、期待していなかったからだ。というのは、専攻委員会はプロテスタントが大勢を占め、彼女がカトリック倫理に忠実であることがキリスト教のある派の人々には快く思われていないということを知っていたからである。

オスロでは、人々は彼女を出迎えるために道に出た。授賞の際、ただ次のように言った。「個人的に私は賞をもらうにふさわしくありません。私はただこの苦しみ的大海原の中で、希望の一滴になろうと努めてきただけです。でも、もしこの一滴がなければ、海はそれが無いのを寂しく思うでしょう」。ノーベル賞の組織委員会の人たちを説得して、伝統的な晩餐会を止めて、それに使われるお金を貧しい人たちに与えることに成功した。マザーの死の一年後、合衆国政府は稀有の仕方彼女の功績を称えた。つまり、合衆国の国籍を与えたのである。

教会の教えへの忠実

マザーはいかなるときも教会への忠実を隠さなかった。教皇ヨハネ・パウロ2世は、司教会議や聖年などの教会の重要な行事に彼女の参加を求めた。

ある新聞記者が、教会の位階制度に関わる質問をマザーに投げかけたことがある。つまり、「17世紀にあなたがおられたとして、異端審問所かガリレオか、あるいは教会か近代科学か、のどちらかを選びなさいと言われたら、どうされたでしょうか」と。彼女は口元に微笑を浮かべて言った。「**教会を選びます**」。

最も弱い人々を守ることを、どこでも訴えた。ノーベル賞の授与式が行われたオスロでさえ、「まだ生まれていない赤ちゃんを守る勇気をもたねばなりません。と言うのは、赤ちゃんは神が家族と国と世界全体にお与えになる最も価値のある贈り物だからです」。また次のようにもよく言っていた。「たとえあなたたちがそれらの赤ちゃんを愛さなくても、私は彼らを愛します。私のところに連れてきてください」。墮胎に対する態度は、常に明白であいまいなところは微塵もなかった。「墮胎は殺人です。人間の命を破壊するものは何でも、愛と、人間一人一人に対する神のご計画と、人間の間和解に反します」。

マドリーで開かれた第10回の国際家族会議での基調講演は、マザー・テレサに任せられた。物静かに、しかしきっぱりと、またしても生命を守ることを強調した。「墮胎は家族の喜びを破壊し、その一致をずたずたにしました。母親というものは、家庭の心となるために作られています。もし自分の子供を殺すなら、もうなにも残りません」。また別な機会には次の話をした。「あるインド人女性が私に打ち明けました。もう8年までのことです。

『私は墮胎をしました。そのために今日でも、その子が生きていたら達しているはずの年齢の子供を見ると、その子から顔を背けてしまいます。その子を見ることができないのです。6歳か7歳の子供を目にするたびに、心の中で、私のあの子も今ごろ6歳か7歳だったはず。私の手を握ってここにいるはずなのに、とってしまうのです』。

聖なる死

人生の最期のときまで、衰弱した体を引きずりながらも、毎朝4時に起床し、日に20時間以上を貧しい人々のために費やし、真夜中過ぎまで働いていた。貧しい人々は、マザーの言葉によれば、「彼らの中に隠れているイエス様です。イエス様は誰からも愛されていない人、世話をされずに捨てておかれている人、エイズに苦しんでいる人、ハンセン病の患者、精神の病に苦しむ人たちの中におられるのです。私たちは貧しい人々においてイエス様に仕えます。私たちが貧しい人、家のない人、病人、孤児、瀕死の人たちを世話し、訪問し、服を着せ、食事を与えているとき、実はイエス様にそうして差し上げているのです。すべて。すべて。私たちがすることすべて、祈りも仕事も、苦しみも、イエス様のためなのです。私たちの人生の理由は、それ以外にありません。それ以外の目的もないのです』。

1989年、マザーの健康が衰えを見せ始めた。心臓を病み、ペースメーカーを入れることになった。またマラリアにもかかる。修道会を離れることを決意するが、神の愛の宣教会はこの申請を受諾しなかった。やっとマザーの死の二三ヶ月前になって、シスター・ニルマラがマザーの後継者に選ばれた。

1997年9月5日、カルカットで聖なる死を遂げる。享年87歳。

「魅力的な」模範

その二日後、教皇ヨハネ・パウロ2世は、マザー・テレサの抜きん出た信仰、その模範の普遍性、その忘れ得ぬ霊的な教えについて話した。「この祈りのときに、二日前にこの世での旅路を終えた、愛すべき姉妹、カルカットのマザー・テレサについて思い出すのは私にとって喜ばしいことです。愛の宣教師。これが、マザー・テレサでした。名前だけでなく事実そうでした、彼女は、魅力的な模範をもって、貧者の中に隠れるキリストに仕えるためすべてを捨てる覚悟のある大勢の人を引っ張っていきました。毎日、まだ夜明け前からご聖体の前でその日を始めました。沈黙の観想の中で、カルカットのマザー・テレサは『私は乾く』という十字架上でのイエスの叫びが響くのを感じていました。心の底まで届いたこの叫びのために、彼女はカルカットのあらゆる路地だけでなく世界のすべてのスラム街に足を運び、貧しい人、捨てられた人、死に行く人たちの中にキリストを探したのです。世界的に貧者の母として知られ、みんなのための雄弁な模範を残し、私たちには神の愛の証拠を残してくれました。神の愛を受け入れた彼女は、それによって自分の人生を、兄弟に自己のすべてを捧げる人生に代えたのです。マザー・テレサが成し遂げた仕事それ

自体が、現代の人々に向けて、残念なことに世間ではしばしば無視されているように見える生命の高い価値を語っています。福音書の教えに従って、彼女は自分が出会ったすべての人、危機に瀕し、苦しみ、無視されたすべての人のよきサマリア人となったのです。

1997年9月、「神の愛の宣教会」のシスターは3914人を数え、123カ国に594の修道院を持っていた。シスターNirmalaの指導の下で、修道会は発展を続け、今日では4000人のシスターが131カ国677の修道院で働いている。

* * * * *

付録。奇跡

マザー・テレサの列福のために認められた奇跡は、非カトリックのインド人女性モニカ・ベスラ、34歳が煩っていた腹部の腫瘍の治癒である。これは1998年に起った。

「胃に腫瘍ができ、日に日にそれは大きくなっていきました。人々は私が妊娠していると思っていました」とモニカ自身が述懐する。シリグリ（西ベンガル州）のR.N.Bhattacharya医師は、腫瘍は7ヶ月の胎児と同じ大きさだったと証言する。「すぐに手術しなければ、ベッドの上で死んでしまうと思いました。」しかし、患者はひどい貧血症も煩っていたために、手術は不可能であった。

医学的治療では治る希望がなくなったとき、その女性は神の愛の宣教会が経営する「死に行く人のための家」に赴いた。マザー・テレサの帰天一周年の日に、モニカはその家の礼拝堂に連れて行ってくれと頼んだ。そこで治癒を願おうと思ったのである。「礼拝堂に入ると、マザー・テレサの写真が目に入りました。そのとき、あたかも一条の光が私に向かって飛び出たように感じ、私は体が麻痺したように感じました。その後、シスターたちは私のためにお祈りしてくれて、私は眠りにつきました。朝の一時に目が覚めると、腫瘍がなくなっていたのです。」

その突然の完全な治癒は医者たちを驚かせた。彼らは自分たちの診断が間違っていなかったと強調し、あらゆる必要な証拠を提出した。治癒の後で、腫瘍を検査するためにした小さな外科手術の跡も見つからなかった。Bhattacharya医師は、「これは私の医師としての人生で出会った最も素晴らしい経験の一つです」と言う。モニカ自身は、その奇跡を信じない人に、「あなたに似たようなことが起るまでお待ちなさい」と言っている。

参考文献

中井俊巳、『マザー・テレサ。愛の花束』、PHP研究所、2003年。

マザーの言葉や逸話が簡潔にまとめられており、また巻末に豊富なマザー・テレサ関係の文献が紹介されている。